

先祖はパワハラ上司らしい 自分は頑張ろう

ケツアゴ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

望まぬ力を得た代償は平穏な日常

失った物を取り戻す為、復讐の為に少年は力を求め、呪術師となる

# 目次

プロローグ	1
パワハラ先祖の親心	5
下僕と義兄	10
術式	14
上弦と下弦	18
嫌われてるぞ、ドーマくん！	23
僕の今後	28
呪術師への認識	33
禪院家の呼び出し	37
同行者	41
愚か者	45
人形と小動物	49
頭無惨	54
ガラスのハート	59

## プロローグ

“それ”が見えたのは何時からなのか覚えていないけれど、僕の視界には周りの人には見えない物が見えていた。

それは僕以外には見えていないって知ったのは見えだしてから数日後で、最初は僕をからかっているんだろうと思ったんだけど、優しいお祖母ちゃんまで変なのは居ないって言うんだから気が付いたんだ。

あれはホラー映画に出て来るお化けと同じで、僕にはそれを見る力が有るんだって。最初は嬉しかったけれど、ある日それは怖さに変わった。だってお使いの途中に町中に立っていた大きな口で短い足が生えた肉の塊みたいなのに気が付いた人が居て、反応したら襲われていた。

「見えているって気が付いたら襲って来るんだ……」

それから毎日見えない振りをして過ごしたんだけど、お使いの帰り道、近道に通った先で変なのが僕の後から付いて来ていた。

「ねえ、君。俺の事、見えてるでしょ？　ちよつと見えない振りが下手かな？　そんなんじゃないや馬鹿な奴は騙せても俺みたいなのは騙せないぜ？」

僕の家は結構古い家で近所からは幽霊屋敷だなんて噂されている。でも家の周りじゃ変なのは見た事が無いし、だから油断していたんだ。

家の裏庭の古い倉は何故か家族の誰も興味を持たないし、近付いちや駄目だって言われているから離れた場所から見ただけなんだけど、今日は偶々倉の裏あたりの塀に沿って歩いてたら塀の上に座っている変なのを見つけた。

ヘラヘラと笑いながら僕に向かって手を振っているのは時代劇にでも出て来そうな格好だけれど瞳が虹色で赤が混じった白っぽい髪。

何か信用に値しない怪しい見た目で、多分この人も人間じゃない。今まで見たどんな化け物よりも化け物だ。

「おいおい、返事くらいしてくれよ。呪霊にだって心が有るんだし、傷付くんだぜ？ 人の嫌がる事を進んでやれって言葉を勘違いしてないかい？」

だから僕は無視してただけだけど気にせずに返事をしないんだけれど気にせず軽薄な喋り方を続ける。でも、僕が家の玄関をくぐった途端に様子が変わった。

「ええっ!?! もしかして君って此処の家の子だったのかい？ それならそうと言ってくれたら良いのに。あつ、でも俺が何か分かっていないっぽいな。君、呪術師って知ってる？」

「……知らない」

「そうか！ あれだけ大勢の身内の人生を狂わせて、先祖が築き上げた物を全部台無しにしたあの方が哀れだと思っただけだけど、君という後継者が誕生したなら全ては必要な犠牲だったって事だ！ うっうっ。本当に良かった……」

「……オジさんは嘘泣きが下手だね。新人の俳優さんみたい」

どうもこの人の言葉は薄っぺらいし、何処か演技に聞こえる。だから指摘したんだけど、怒らせたら不味いかな？ 多分この人もお化けだし。

えっと、“じゅれい”だっけ？ それがお化けの名前なのかな？

「おっと、結構酷いな。俺は本当に嬉し泣きしているんだぜ？ じゃあ、早速挨拶をしておくか。俺の名は童磨。今後君を守り教え導き、地獄への道行きに同行する家来さ」

「……創示。鬼邸おにやしき 創示そうじ。家来って何の事？ それに地獄ってどうして？」

「そうだな。先ずは君のご先祖である無惨様と、呪術師と呪霊について教えてあげよう。何せ君には今後穏やかな日常は許されないんだからさ。ああ、こんな小さい子が望まずに過酷な道を歩むなんてどうして人生ってのは残酷なんだ」

「だから泣き真似は止めてって。……じゃあお使いの品を渡したら僕の部屋に行こうよ」

ずっと見えていた存在について教えてくれるみたいだし、多分あつちに行けって言っても聞いてくれなさそうだ。なら教えて貰った方が良いよね？

凄く胡散臭いけれど……。

「おいおい、そんな目で見ないでくれよ。俺だって心を持つてるって言っただろ？」

「……嘘っぽい」

どうも童磨の事は信用出来ないし、ずっと無視してた方が良かったかも……。

今、凄く後悔してるよ、僕。

だって凄く胡散臭いんだもの！

「えっと、その負の感情から生まれるお化けが呪霊で、それを倒す力を持つのは呪術師って事で良いんだよね？ それで別々の呪術が使える術式って奴が引き継がれたり引き継がれなかったり」

あの後、家には誰も居なかったので買って来た物を冷蔵庫に入れて、カレーを温めていたコンロの火を危ないから消した後で僕は胡散臭い童磨の話聞いていた。

「ああ、そうさ。ちなみに俺は特殊な呪霊でね。君のご先祖様である鬼邸無惨様に仕えていて、長い年月を得て漸く同じ術式に目覚めた君に仕える事になったんだ。いやあ、あの方の術式も嫌われたもんだぜ。何せ君以外には一切引き継がれなかったんだからさ。お陰で無惨様の死後に目覚めたら街並みが様変わりして驚いたぜ」

何となくだけれどご先祖様の無惨って人は多分性格が悪くて、目の前の呪霊はそんな人に実は好かれていなかった気がするんだけどさ。

なんでかそんな確信があったよ。

「……あれ？ でも僕以外の誰も呪霊は見えてないよ？」

「うんうん、だから俺は哀れなんだ。だって呪術師ってのは凄い選

民思考だつてのに、術式を引き継げない子達は一切の呪力を扱えない非呪術師にされる呪いを掛けられたんだから」

「ご先祖様に？」

「うん。反対する奴に」私のする事はすべからく正しい。私は間違えない。お前如きが私の行動を決める気か」とか言つてた。俺には詳しく分からないんだけど、本来は自分の意志で結ばなくちゃ意味の無い縛りを呪術を使って強制した結果らしいぜ。特殊な縛りだけじゃ本人には才能があつたからさ。まあ、その結果が誰も引き継げなくつて呪術師である事さえ子孫に忘れられてるんだけど。笑えるよな」

「……取り敢えず」仕える」とか言われても信用しちや駄目だつてのは伝わった」

聞く限りじやパワハラ上司つて感じのご先祖様だけれど、目の前の……ええ!?! 目玉ほじくつてる!?!

「いやー。どうもお気に召さない態度を取つたみたいだからお詫びにね。次は舌でも引っこ抜くかい? おいおい、この程度で吐いてちや今後保たないから頑張りなよ」

目の前で人の姿をした相手が目玉をほじくる姿を見せられた瞬間、胃の中の物が逆流して来た。背中に童磨の手が当てられてさすつて来るけれど、ヘラヘラした軽薄な声を聞くと更に気持ち悪くなつてくる。

(あはははは。一応仕える相手だから気は使うけれど……ちよつと遊んでも良いよな? ああ、楽しみだなあ。この子が染まつて行くのがさ)

## パワハラ先祖の親心

「何をあの程度で気絶している。起きろ」

うっ、此処はどこ？ 目の前で目玉をえぐり出す姿を見たらゲロ吐いちやって、それから……。

聞こえて来た怖い声に僕は目を覚まして周囲を見渡す。住み慣れた家とは全然違う何処かの老舗旅館みたいな古い建物だけれど上下左右が無茶苦茶な見知らぬ場所で、目の前には怖い顔の男の人が僕を睨みながら立っていた。

「漸く起きたか。未熟者めが。先ずは頭を垂れて這い蹲れ」

「はいつく……？」

「土下座をしろと……いや、私がさせてやろう」

それは突然の事だった。少し離れていた男の人は一瞬で僕の目の前に現れて頭を掴むと床に押さえつける。この人、一体誰？ それに此処は？

「何だ、その程度も知らぬとはな。……童磨の奴は何をやっているのだ。千年の時の末に漸く私の後継者が生まれたというのに」

この人、僕の心を？ それに童磨って事は……。

「無惨……ぎやつ!？」

名前を口にした瞬間、僕の頭は力強く床に叩きつけられる。床板が割れる位の勢いで凄く痛くて僕は思わず悲鳴を上げた。

「無惨様だ。後継者といえど調子に乗るな。貴様と私では同じ鬼邸の者でも地の底と天の果て以上の差が存在するのだからな」

「ご、ごめんなさ……」

「誰が口を開くのを許可した？ 貴様の詰まらぬ判断で私の貴重な時間を……クズが。もう時間か」

僕の頭を掴んだ指先が食い込みそうな程に力を込められる中、突然周囲が歪んだ。まるで古いテレビの画面が乱れたみたいで、無惨……様は不機嫌そうな顔をしたけれど、続いて向けたのは少し機嫌が良さそうで、一層怖い顔だ。

「再び会う日までには少しはマシになっておけ。貴様は唯一私の子孫たる資格を、術式を受け継いで生まれた身なのだからな。自分でも驚いたが親心の様な物さえ感じている。だから力の正体を知った褒美を用意してやった。喜ぶが良い。これで詰まらぬ輩にくだらん理由で負ける事もあるまい」

ご褒美だって言われても僕の中には不安しか存在しない。だって、この人から感じるのは恐怖だけだったんだから……。

景色の揺れは凄くなるばかりで目の前の相手の顔も分からないし凄いいノイズがして周りの音も聞こえない。

ああ、これで解放されるみたいだし助かった……。

「力を高めよ。技を磨け。そうすれば自ずと私に再び会う日が来るだろう。その時は直々に稽古を付けてやる。長らく無能ばかりが生まれてしまったが、故に貴様には私さえも超える可能性が有るのだからな」

最後にそんな声だけはハッキリと聞こえて僕は絶望に叩き落とされる。……本当の絶望は此処からだなんて知りもせずに。

「やあ！ 急に気絶したから心配したんだ。子供とはいえ脆いなあ。それでは今後待つ地獄に耐えらぬだろうさ」

「……最悪の気分」

目が覚めたら見知ったお風呂場で童磨の顔が間近に在って、先生には悪いけれど道場で習った突きを顔面に叩き込んだのに少しも効いていない。何でも呪力が籠もっていないかららしい。

「そりゃゲロまみれで気を失ったんだから気分も悪くなるさ。でも俺が綺麗にしてあげたから安心してよ」

「少しも安心出来ないよ。お母さん達だってこんな時間からお風呂場に居たら変に思うだろうし、さつきは居間で吐いちゃったし……うっぷ」

さつきまで見ていた夢みたいだけれど多分夢じゃない場所での事もあって再び吐き気が込み上げて来る。童磨はお母さん達には見え

ないだろうし……あれ？

開いた扉の向こうにはお祖父ちゃんが日課にしている昼の入浴をする為に置かれた洗濯カゴに服が脱いで入れられているけど、何時もは同じ服を着るのはどうして？ それにお母さんだってカレーを火に掛けっぱなしで何処かに行っているし、お父さんだって今日はお休みの筈だ。お使いから帰ったら一緒にテレビゲームをする約束だったし、お祖母ちゃんだって……何で誰も居ないの？

「お前、僕の家族に何かした？」

「いや？ 俺は何もしていないさ。俺はね。君には思い当たる節があるんじゃないかな？ だって無惨様が俺を封印する前に教えてくれたんだぜ。」後継者には家族を人質に取られて困る様な苦労はさせはしない。お前が目覚める時、それは後継者の力が安定する頃だ」つてね」

「あ……」

「ご褒美を用意したって言われたのを思い出す。認めたくない事実が、受け入れられない現実が僕の頭に浮かんで来た。

「安心しなよ。あの方は術式を継承した子孫以外は子孫だと認めていないけれど、子孫が気にせずに済むように一瞬で消え失せる位の思い遣りは有るって思い込んでるからさ。だから君は気にしなくて良い。君の家族は君が呪力に目覚めたからこの世から消え去ったけれど、それは君の責任じゃないからね」

「あ……ああ……あああああああああああああああああああつ!？」

童磨が何か言っているけれど僕の頭には入って来ない。僕が、僕がそんな力なんかを受け継いだから？ だから家族が消えちゃったの？ もう二度と会えないの？

「ああ、そうだ。君みたいに苦しんでやる気を無くすって事は一切予想していないみたいだったし、先祖代々の呪術師の一族ってのは基本

そんな感じだから俺が助言しておいたよ。“親に甘えたい盛りだったり長い間呪力を持たないのが続けば困るし、次のご褒美を与えてはどうか”ってね。半殺しにされたけれど一考しておくってさ。……まあ、無惨様の呪いで消え去ったんだから、同じ術式を持つ君が無惨様を超えれば家族を取り戻せる……かも知れないぜ？」

「……本当？」

「ああ、本当の話だとも。何せ俺は他の仲間を全員喰って力を高めた上で後継者に仕えるべく封印された存在だ。君との間には主従関係を結ぶ縛りが存在するし、嘘は言っていない。……じゃあ、今日から頑張ろう。術式に関する基本的な事は後継者の君だけが触れられる書物に乗っている筈だし、基本的な呪力のイロハは俺が教えてあげるからさ。だから俺を信用してよ」

「……嫌だ」

差し出された手を僕は振り払う。此奴は僕から家族を奪った奴の手下だ。それに会った時から絶対に信用出来ないって思えて仕方無い。

でも、それでも……。

「お前なんか信用しない。利用して僕の目標を叶えるだけだ」

「それで良いんじゃないかな？ どっちみちやる気を出してくれて俺は嬉しいぜ。おっと、無惨様に対する態度と同じ方が良いかな？」

「……気持ち悪いから却下」

吐き気は酷くなる一方だし、今も泣き出したい。でも、それを怒りが抑え付ける。彼奴は、無惨は僕が強くなれば会うだろうって言っていた。童磨が信用出来ないけれど家族を取り戻す為にも、無惨に復讐する為にも僕は強くならないといけないんだ。

「じゃあ、倉に行こうか。向かう最中に君の術式に関して教えてあげよう。まあ、家や学校の辺りには呪霊が居ないし、自覚がある前から無意識に使ってるみたいだけだよ。……自覚した事で逆に乱れているし、流石に連中もそろそろ気が付くかな？ どっちが先に来るのか

楽しみだ」

何か不安を煽る事を言っている童磨だけれど多分わざとだ。こうやって楽しんでいる……演技をしているっぽい。

此奴、本当に感情があるのかさえ疑問だ。

「……あつ！ さっきは仲間を全員食べたって言ったけれど、実は一匹残ってるのが多分倉の中に仕舞っている箱に封印しているだろうし、未だ名前が無いから付けてあげてよ」

……どんな奴だろう？ 凄く嫌な予感がするんだけれど……。

「まあ、カエルの子供みたいで可愛い奴さ。……現代なら俺よりも強くなるんじゃないかな？」

## 下僕と義兄

### 報告書

以前より確認されていた呪力の空白地帯の乱れを観測。同時期に起こった各地の公害汚染物質の消失現象の際に確認されていた児童を二つの空白地帯に含まれる小学校の生徒及び住宅の住民と確認。

周辺地域で活動する“窓”が知人だとして同行を要請。児童との接触を計る事とする。

尚、未確認事項ではあるが特級に匹敵する呪霊が児童と行動を共にするという情報も有り。接触の際は支援を要請する。

「やれやれ、前々から聞いてはいたが此処までとはな……」

指令を受け報告書にあった日本家屋の前までやって来た夜蛾は周囲から一切の呪力を感じない事に驚いていた。

呪力とは人の負の感情から発生するエネルギーであり、呪霊を形作る物。故に病院や学校、ホラースポット等に多く集まるのだが、此処に来る前に立ち寄った小学校も目の前の家と同様に不自然な程に呪力を感じない。

「それで件の少年は親戚だったな？ 狛治」

「はい。事故死した俺の妻の弟で、普段やっている道場の門下生です。前から呪霊が見え始めた様子が有ったので接触すべきか相談していたのですが……」

（俺の妻が死んだのはあの子の出産予定日の数日前の事、近所の剣道道場の師範の息子の飲酒運転による事故だった。妻が死んだ後も親戚付き合いは続いているし、俺にとってあの子は自分の弟と同じ存在だ。……人違いなら良いのだが）

「その時期と空白地帯の乱れが発生した時期が合うとなると間違いは無さそうだな」

調べた限りでは数百年に遡っても非呪術師の家系であり、他の親族にも呪霊を見る力の持ち主は存在しなかった事から偶に存在する突

然目覚めたケースだと夜蛾は判断する。

「その子……確か創示君は七歳だったな。空白地帯が突然発生した時期から考えて何らかの術式を無意識に使っているという事か。共に行動する呪霊の情報も考えれば確認の結果次第では保護をした方が……」

調べる限りでは一般家庭の出であり、呪詛師の可能性は極めて低い。ならば無自覚の呪術の行使だろうし、保護が妥当だと判断した夜蛾は伯治を連れて来たのは正解であったと思う。

呪霊に視線を悟られない為のサングラス姿だが、任侠映画に出番がありそうな強面の自覚は有ったからだ。

問題があるとすれば共に行動していたという呪霊だが、家からその様な気配は一切せず、今は居ないと判断した。

声が背後から聞こえたのはその時だ。

「ああ、それは助かるな。俺じゃあ教えてあげられる事に限界があるし、餅は餅屋だ。俺の主の保護を頼むよ」

「！！」

突然響いた声と感じる強大な呪力。二人が乗って来た車に寄りかかる呪霊は報告書にあった見た目に合致する。感じる力も大袈裟な話ではなく特級に分類される規模。

だが、夜蛾が気になったのは呪霊の言葉だ。

「主……だど？ この家の少年の事か？」

「ああ、その通り。まあ、千年前に結んだ縛りで俺はあの子に仕えてるのさ。取り敢えず中でお茶でもどうだい？ 茶菓子でも出すよ」

呪霊の姿が消え、二人の背後の門が開く音がする。振り向けば件の呪霊の姿があり、ヘラヘラとした笑みを浮かべながら手招きをしていた。

「虎穴に入らずんば、か。おい、お前は戻って……」

「いえ、創示は俺の生徒で……弟ですから」

下がる気はないと判断した夜蛾は伯治の同行を許可し、警戒を最大限にしながら家の中に入っていった……。

「それで笑えると思わないかい？ 術式に拘る余りに子孫達の呪力を一切残らず奪い去り、その結果として呪術師の一族である事すら忘れられているんだからさ」

突如現れて家の中に招き入れた呪霊……童磨は流暢な言葉遣いで比較的友好的な態度で接して来た。“信用出来ないだろうから”と口にして嘘を言わない事と互いに非戦闘という条件で縛りを結ぶまでして、語るのは鬼邸家の千年前の先祖の話。

「……無惨か」

どうやら夜蛾さんは知っているみたいだが俺は聞いた事がない。それよりも俺には気になる事があった。

「おい、創示は無事なんだろうな？ あの子に何かあった時は……」

「勿論無事だよ。あの子は俺の主だって言っただろう？ 狛治殿。狛治殿じゃ俺には到底敵うまいが、その蛮勇は評価するよ」

ヘラヘラと笑う顔を向けて来る呪霊には苛立ちしか感じない。言葉の全てが軽薄で胡散臭い。縛りを結んでも言葉に信用に足る重みを感じないでいた。

「しかし自らと同じ術式を持たないで生まれた一族への扱いもそうだが……思い遣りと口にしながら家族を奪う行為には反吐が出る」

「だろう？ 主もそれで呪術師になる覚悟を決めたんだが、健気だとは思わないか？ そんな動機じゃ途中で死ぬ事になったり自分の行いを嫌悪する時、絶対に家族を恨む事になるのにさ」

「……だったら何故それを口にしらない。止めるのが筋だろう」

何で此奴と創示が共に行動しているのかを聞き、そうなる様に誘導した此奴を俺は絶対に許さないだろう。

だが、お前は違うぞ、創示。一番辛いのはお前で、悪いのは無惨とやらと童磨だ。

一番苦しんでいるお前が何で茨の道を進む必要が有るんだ。

「いやいや、だって俺は主の意思を尊重するだけだからね。おっと、縛りを結んでいるのを忘れたのかい？ これ以上主の周りから誰かが

消えるのは辛いから止めてくれよ」

「……狛治」

振り抜きそうになった拳は夜蛾さんに掴まれ、目の前の男にたたき込めない。俺の拳が効かないのは分かっているが、それでも……。

いや、駄目だ。一番怒るべきなのがあの子なら、俺の役目はなんだ？ あの子を守る事だ。

「夜蛾さん、保護が決まった後、俺が身元引受人になります」

「そうか。では任せる。……この先に居る様だな」

何度も来た家だから目の前の襖が居間に続いて居るのは知っている。遊びに行けばテレビを見ていた皆が出迎えてくれた場所だ。

「創示、入るぞ」

「先生!」

声を掛ければ驚いた声が聞こえ、襖を開ければ何時もと同じく座椅子に腰掛けた創示の姿がある。だが、何時もなら座椅子に座った誰かの膝に座って居たのに今は一人だ。

「えっと、先生も呪術師だったの？ そっちのヤクザみたいなオジさんは誰？」

「いや、俺は呪術師ではない。そんな事より……辛かったな」

少しショックを受けた夜蛾さんを置き去りにして俺は創示を抱き締めてやっていた。妻が死んだ時、俺は悲しくて泣いた。だが、此奴は未だ七歳で祖父母と両親を急に失ったんだ。俺なんかの悲しみなんてそれに比べれば小さな物だろう。

「じゃあ俺は茶菓子の準備をしてくるし、主はその間に術式の説明でもしておいてくれ。呪霊も呪術も呪物すら喰らい自在に操る無惨から受け継いだ物のさ」

……呪術師にならずに過ごせと説得はするが、もし駄目なら此奴を殴り飛ばす為の修行はきっちり付けてやろう。

過酷な世界で生き抜く為に。大切な家族を恨む時が来ない様に……。

## 術式

先生と夜蛾さんが訪ねて来る数日前、僕と童磨の二人で行く公害発生源場ツアー出発日まで僕が受け継いだ術式を始めとした呪術の授業が行われていたんだ。

「君の術式の根幹は“変化”。変化つてのは劣化だの何だの言つて嫌い、“不変”が好きだって言つていたんだから笑えるんだけどね。その術式の為に君以外から呪力を奪つたんだから尚更だ。ああ、何て哀れなんだろう。呪術師とは特権階級で選ばれた人間だつて教わりながらも使えないんだから。ほら、じゃあさつき試してみたいに使つてご覧」

心は空っぽで性格は“糞のどぶ川煮込み　く腐敗した生ゴミを添えて”みたいだけれど、童磨は能力だけは高いらしく教え方も上手だ。これがなかったら絶対に他のが残されて、此奴は絶対に消されていただろう。

寧ろ多少能力が落ちてもマトモな性格のになかったのか問い詰めたいけれど、無惨は童磨と同レベルだから多分他のも大概だと思ふ。

自称芸術家のナルシストとか承認欲求の塊とか居そうな気がするよ。

……僕の目標は術式の継承に伴つて心の奥底に居るらしい無惨の撃破、そして縛りによつて消えた家族を取り戻す事。この童磨は嫌いだけれど、その為には何だつて利用してやる。

それにしても……。

「縛りつて強制するのは難しいんだよね？　それを何代にも渡つて自分の死後も結ばせてるつて割りには、お前の性格をどうにか出来なかつたの？」

「ちよつと口が過ぎるぜ？　無惨様は能力が高いのに行動がお粗末様だったのは認めるけれど。名前も頭も無惨だよな」

「いや、口が過ぎるのはどつちだつて話じゃない？　……ま、良いか」  
相変わらず表面だけショックを受けた振りをしている童磨に教

わった通りに呪力を操って術式を発動させる。僕の目の前で空中が上下に裂けて巨大な口が出現したんだけど、牙が鋭くって鬼か何かの口みたいだ。

試しに中に頭を入れて覗き込んで見たけれど凄く広くてどれだけ物が入るのか分からない。お祖父ちゃんみたいな口臭がしなくて良かったな。

「おいおい、躊躇無く頭を突っ込むとか君もイかれてるな。俺は下僕兼指導者として心配だぜ」

「胡散臭っ。所でこれって何の役に立つの？」

「そう言えば詳しく教えていなかったっけ？ 術式の名前は“十二鬼月”。それにちなんで上弦と下弦それぞれ六体ずつの呪霊を創り出して従えたり出来るんだ。因みに俺は上弦の式さ」

僕の顔に自分の目を近付ける童磨。目潰ししてやろうと見ると両目に文字が浮き出していた。……えっと、何て読むんだろう？

「……呪霊を創り出す？」

「うん、そうだよ、先生。えっと、先ずこれを見て欲しいんだけど……」

「これは……?! 呪力の結晶だと？ いや、負でも正でもない言わば無色の……」

僕が口を出現させると中に手を突っ込んで砂利位の大きさをした透明の物体を取り出して手渡す。呪力が無い人には見えない物だけれど、呪術師にはどんな物なのか分かるのか夜蛾さんには分かったみたい。

「これは一切の方向性を失った呪力の結晶で、握り潰したら呪力が回復するらしいよ。コップの中身以上は注げないみたいに限度が有るらしいけれど。ついでにこっちが負の方で、こっちが正の方。これは握ったら怪我が回復する」

「正の力……。その年齢で反転術式が使えるのか」

「童磨には普通の呪力より攻撃が通るらしいからって頑張って覚えた

よ。……本人がタフだから大して効果が無かったけれど」

「教えたのは俺だぜ。教える為に無理矢理覚えさせられたからね。……呪霊を創る方は今から見せた方が良いか。さて、この結晶は無色だけれど、方向性を持った呪力を後から足せば全てを染める事が可能だ。ごちゃ混ぜになった負の念よりも一方方向に力を注いだ方が強いんだ。俺が冷害やら雪害とかの寒さへの畏れを元にしてみたいにね」

テーブルの上のお茶に童磨が指を伸ばせば瞬く間に凍り付く。夜蛾さんや先生は呪術を使った童磨に警戒を見せるけれど、童磨は気にせず倉に保管していた呪物を取り出した。

「無惨様の縛りの一つに〃呪物を収集する〃ってのが有ってさ。見えもしないのに無意識で集め、外に漏れない呪術を使った倉に貯蔵していたよ。大抵は口に入れて呪力を搾り取るだけなんだけど……この二つは面白いのが創れそうだから取っておいたんだ」

「じゃあ、早速」

童磨が出したのは結構古いかボロボロの鎌と簪。凄く強い呪力を感じるんだけど、互いに結び付いて離れまいとしているんだ。もしかして持ち主は家族だったのかな？

「いや、待ちなさい。君の力を試す必要は有るが……ちやんと準備を整えた場でだ」

「此处で創り出すのは不安材料が多いからな。大丈夫、俺も一緒に行くから呪術高専の施設に行こう。其処で試すだけ試した後はお前の保護を開始するから」

夜蛾さんが慌てた様子で僕を止め、先生が優しく語り掛けて来る。……うーん、確かに不安だよね。童磨の奴に乗せられてたよ。

「じゃあ、今から向かうが高速のインターチェンジでお昼ご飯にしよう」

夜蛾さんと先生と一緒に大きな車に乗り込み、童磨は口の一つに入って貰った。上弦に選ばれたら色々特権が有って、口の一つに個室を与えられるらしいんだ。

「まあ、俺達の生殺与奪の権利は君に委ねられているし、謀反を起こしても自動で処刑が行われるのは共通なだけだ。んじゃあ、俺は酒風呂にでも入っているよ。……昨日戦った三匹みたいに、その二人じゃ到底敵わないのに襲われたら助けに入るけどね」

ヒラヒラと手を振りながら口の中に童磨が入って行く。

「先生、生殺与奪って何？」

「彼奴を好きな時に退治出来るって事だ。ほら、シートベルトをちやんとしておけ」

「はい」

まあ、どうせ術式を使いこなせない今の僕じゃ無理だろうし、彼奴って嘘を禁じられていても勘違いさせれば良いやって性悪だし……少し眠くなつて来たや。

昨日は夜遅くまで起きていたからか車の揺れの心地良さもあつて僕は眠りに落ちて行った……。

「……夜蛾さん、創示はどうなるでしょうか？」

「危険視される一方で能力は役に立つ。まあ、監視を付けるのは確定だが秘匿死刑にはならないだろう。……あの童磨という呪霊も情報を小出しにして自分に易々と手を出せない様になっているな。千年前に鬼邸無惨……鬼舞辻無惨に仕えていた特級呪霊か。随分と情報を持っていていそうだし、従属の縛りも有るから除霊するにしても延期だろう。不愉快な事だが。……しかし、海やら山やらで公害物質を消していたのが呪霊の力らしいが、随分と子供らしい名を付けたな」

「怪獣」とまで付けていますからね。絵本か特撮番組にでも影響されたのでしょうか。……公害怪獣ヘドラ、一体どんなのやら。ああ、確か二年生に呪霊を使役する特級呪術師が居るそうですね」

## 上弦と下弦

僕のお父さんは体の大きな人だった。凄く逞しくて、ちよつと涙もろい。あと、お経を唱える癖が有った。

「南無……。可哀想に可哀想に……」

道端で車に牽かれたらしい猫の死体に手を合わせて涙を流すお父さんは優しい人だなんて思ったよ。

……この後に不審者として通報されたけれど。僕と公園に遊びに行くと十回に一回は通報されていて、警察の人も一応駆けつけるけれどお父さんの姿を確認したら直ぐに戻って行ってたんだ。

そんなお父さんの趣味は骨董屋を巡る事で、旅行先でも行ってたんだけれど、ある日買つて来た古い柵の中に隠し扉が有って、中に入っていたのは下手くそな木彫りの笛。

僕はそれが何故か気に入つてお父さんに貰ったんだけど、持っているだけで不思議な感じがするんだ。

……今なら分かるんだけど、これには呪物と同じで強い力が込められている。それも呪力とは正反対の……。

「到着したぞ。ほら、疲れているだろうが少し頑張ろう。終わったら寝て良いからな」

「先生。じゅじゅつこーせんって東京だよな？ 此処、凄いい田舎っぽい……」

「東京も郊外はこんな感じだ。……まあ、今後も何度か来るだろうし、観光はその時にだ」

思えばテレビで観る東京の流行のお菓子とかレジャー施設には一度も行った事が無かったし、どんな所かと期待していたら着いた先は山の中。

ちよつと残念だなんて思っていると空中に口が勝手に出現、童磨が出て来て……警報が鳴り響いた。

「おや？ 矢つ張り呪霊が侵入したら知らせる結界が張ってたのか。いやー、ごめん。これは大騒ぎだな」

「……貴様、分かっていただろう。鬼邸君、そういう訳だから後で創った呪霊を登録する事になる」

「はい」

凄い音でアラームが鳴っているし、校舎の方で少し騒がしいのが聞こえて来るけれども童磨はヘラヘラ笑いながら口だけ謝ってる。

「童磨、あんまり悪戯しちゃ駄目だよ」

「おっと、お叱りを受けてしまったな。これは反省せねば」

「いや、お前は反省などしないだろう」

「狛治殿は手厳しいなあ。俺だって悪いと思つたら反省するとも」

つまりは悪いと思わなかったら反省しないって事だよな？

多分夜蛾さんも先生もその事には気が付いてるけれど童磨はのりくらしりと追及を避けるばかりで、アラームが鳴り止んで僕達が先に進んだのは少し後の事だった。

「やあ。君が創示君だね。私は夏油傑だ。君の術式に似た術式を使うから呼ばれたよ。宜しくね」

「うん、宜しくお願ひします」

校庭っぽい所まで来れば待っていたのは数人で、その中に居た前髪が少し変なお兄さんが話し掛けて来る。

……あれ？ このお兄さん、呪霊を体内に入れてる？

「お兄さん、変な物食べてお腹壊さない？ 童磨も呪霊を食べるけれど、人間が食べたら凄く変な味だと言ってたよ」

「呪霊練術か。千年前にも知り合いが居たけれど、ゲロを拭いた雑巾の味だつて愚痴をこぼしてたよ。俺だったらそんなの食べたら鬱になつちゃうな。確か不死川つて名乗ってたっけ」

「……いや、私は平気だよ」

夏油さんは平気だつて言っているけれど、お母さん達が僕の誕生日の前、お姉ちゃんの命日が近付いたら見せる表情に少し似ているし、多分本当に嫌な味なんだろうなあ……。

多分周りに心配されるのが嫌で隠してるっぽいし、童磨ったら絶対見抜いて言ってるよ。

本当に能力は頼れるのに人間性は(呪霊だけれど)本当に酷いもの。後で代わりに謝っておかないと。

「それよりも君の呪術を見せてくれるかい？　呪霊を創り出す所を見てみたいからさ」

この人は良い人っぽいな。遠くから何かを使って見ているのを感じるけれど、この人が此処に居るのは多分僕の為だろうし、周りの人も童磨の言葉を聞いて心配そうにしている。

嘘だっと思えたら良かったんだけど、嘘を言わないって縛りを結んでるからさ……。

「うん、じゃあ、今から創るね。童磨、この前の三体から奪った分全部使うよ？　容量もそれが限界っぽいしさ」

なんか童磨が“近くに指が有るから取りに行こう”って向かった先で遭遇した呪霊。童磨が押さえ込んでる内に少し食べさせて貰ったんだけど、特に火山みたいな頭のが強かった。

最後には逃げられたって言うか、童磨が“あれだけ強いのは珍しいし、今後も食べる為に”って逃がしたんだけれどさ。

「限界？　君が創れる強さの限界って事かい？」

「うーん、半分正解。無色の力に加える核となる呪力毎に器の容量が有って、強い奴はその後の呪霊を食べた時の吸収効率も良いらしいんだ。……あつ、五個余ったからあげるよ。これを呪霊に食べさせたら強くなるし、不味いのを食べる回数を減らせるよね？」

「あ、ありがとう」

先生達に見せたのは砂利程度の大きさだけれど、今出したのは野球ボールサイズのが数十個。容量の限界を感じたから余分なのを夏油さんにあげて、鎌と簪から吸い取った呪力を混ぜる。

呪力は透明な力の結晶を真っ黒に染めて、やがて真っ黒な人形が二つ現れる。それが瞬きをした時には人の姿になっていたんだ。

「君達のお名前は？」

“十二鬼月”で誕生した呪霊には基本的に名前が無いんだけど、今回みたいに誰かの持ち物に籠もった呪力の場合は別で、持ち主の記憶や人格を引き継いで居るんだ。

「……妓夫太郎」

「ぎゆうたろう？ 牛？」

「いや、違うなあ。餓鬼に説明しても分からねえだろうなあ。随分とマトモに育ったみたいだからなあ」

「私は梅……だけれど折角の新しい人生……人生で良いのかな？ お兄ちゃん。お兄ちゃんも新しい名前にする？」

「俺は別に良い。お前だけ新しいのを貰ええ」

一人は髪を振り乱したお兄さんで、凄くガリガリで猫背な上に歯並びも悪い。体にある斑点は何だろうか？

「どんな名前が良いの？ お姉さん美人だし、それっぽい名前から取る？」

もう一人は着物の帯と同じ模様が顔にも有るけれど凄く美人のお姉さんで、ちよつと寒そうな格好。夏油さんは顔を真っ赤にして横を向いてるよ。

「先に言っておくけれどそのままは嫌よ？ 少しは捻りなさい」

「じゃあ、この前テレビで観たダツキからダキ。キの部分はお姫様の姫って漢字がキって読むらしいしき」

「だったらダの部分の蛇とかどうだい？」

「……ねえ、お兄ちゃん。私、此奴嫌い。蛇とか無いわ。……墮落のダで墮姫で」

「分かった！ 宜しくね。妓夫太郎と墮姫」

あつ、童磨って同僚にも即座に嫌われるんだね。

因みに二人揃って瞳には上弦の文字が浮き出ている。数字は十二体揃ってないから無惨から繰り越しの童磨以外は持って無いんだ。

「えっと、次は残りのも見せた方が良さそうだよね？ ヘドラ以外の二

体は上弦じゃなくて、上弦の部下の役割の下弦なんだけれど。因みに童磨は部下にした下弦の式に嫌われてるんだ。” さっさとくたばれば良い” って思われてるよ」

下弦用の大部屋に繋がる口が開いて中から二体の呪霊が現れる。

「何だあ？ ちっ！ 新人は上弦かよ。忌々しい」

最初に出て来たのは長い毛を振り乱した四足歩行の獣。蛇の尻尾と虎の胴体、そして猿のお面。下弦の内の一匹” 鶴”。ちよつと態度が悪くて、弱い者苛めが好きだから性格も悪い。

「……駄目ですよ。主の紹介を兼ねているんですから。それに新人っと言つても数日の差です。……これ以上騒ぐなら触りますよ？」

もう一人は黒い肌、紫の髪のお姉さん。髑髏の仮面で顔を隠しているけれど、凄く可愛い顔なんだ。

こっちも下弦で童磨の見張りの為に部下になって貰った” 静謐のハサン”。

ちよつと内気なお姉さん。

そして最後に童磨と同じ上弦。この前戦ったのが” 自然への畏れの呪霊なら、こっちは” 自然を汚す事への恐れ” ……らしい。

「へドラ、出ておいで」

その名も……公害怪獣へドラ。空中に巨大な口が現れて、中から十五メートル程の大きさで四足歩行のへドラの怪物が這い出して来た。

嫌われてるぞ、ドーマくん！

「此奴がヘドラ。……確かに“怪獣”だね」

空中に現れた大きな口から這い出して来たヘドラの姿に夏油さんは暑くないのに汗を流しているし、どんな見た目なのか教えてる先生や夜蛾さんも驚いていた。

術式をちゃんと使える様になってから呪力探知？ ってのが使えるようにもなつたんだけれど、それを使えば遠くから様子を見ている人達も驚いているのが分かった。

……あの術、小学校のお昼休みに使えば家のテレビとかこっそり観れそうで良いなあ。

「……」

ヘドラは四足歩行で動く建物位の巨体で、真つ赤な瞳には上弦の文字が刻まれている。妓夫太郎と堕姫も見上げて驚いているや。

「格好良いでしょ！ 妓夫太郎もダークヒーローっぽくって格好良いけれど、ヘドラも特撮に出て来そうだし」

「……おい、一応誉められてるんだよなあ？ 梅……堕姫、俺、あれと一緒に扱いだがよお」

「良いんじゃないの？ お兄ちゃんを醜いって言ったなら目玉を潰してやりたいけれど、誉めたんだから」

「そうかあ。……一応乱暴な行動は自重しろよお。此処は吉原じゃないんだからよお」

吉原？ うーん、お祖父ちゃんが好きだった落語で名前だけは知っているけれど詳しい事は分からないや。

でも、妓夫太郎が最初は困った様子だったのに堕姫に誉められて少し嬉しそうなのは良かったなあ。

「……」

「此奴は喋らないのだな。他の連中は随分と流暢に話す上に君には友好的だが」

出て来てからずっと身動きせずに僕達を眺めるだけのヘドラを見

上げながら夜蛾さんが呟く。

確かに妓夫太郎達はちゃんと話が通じるし、呪力だつてこの場にいる殆どの人よりも多いけれど大人しくしてくれている。……ちよつと態度は悪いけどね。

「私達はこの肉体を持った瞬間に縛りを結んでいますので個人差はあつても主従関係に異議は有りません。……私は恩も有りますので」「恩?」

静謐のハサン……以後ハサンは背後から僕を抱きしめてほつぺを触りながら答える。こう密着されたら少し恥ずかしいけれど、人を触るのが好きだから仕方無いよね。可愛いお姉さんだし。

「……私は毒の娘、全身だけでなく吐く息や汗にすら毒を持つ身として生きていたのです。ですが呪霊の身になつた時に少しだけ生前の能力を改造して貰い、こうして他者に触れても殺す事がなくなりました……」

「どんなのが創れるかは分からないけれど、術式を使えば大本は同じ範囲で改造は可能だから。僕が創つた関係か僕には効かないんだけど、鵜が脅かそうと顔を近付けた途端に毒を喰らっちゃつて、慌てて改造したんだよ」

「主、テメツ！ 余計な事を言うんじゃないやねえよ！」

あの時の鵜つたら、数秒先に誕生しただけなのに先輩後輩がどうか言つて顔を近付けた途端に倒れたんだからなあ。

それからハサンの事が苦手だし、多分鵜と強さ自体は変わらないから術式の効果だつて低いだろうから今後もこんな感じだろう。

「改造……か。それは創つた呪霊以外でも可能なのか?」

「さあ? 俺が無惨様に仕えていた頃は他人を改造なんてしなかったしな。あの方、基本的に臆病者だし、縛りをガチガチに結んでいる俺達を辛うじて警戒しないって感じだつたぜ。だから他人を強くしようとか考えもしなかったな。まあ、千年の間に随分と劣化した今の呪術師相手なら大丈夫だろうけど」

「ちよつと童磨は黙つてて。それでヘドラなんだけれど、元から喋れないみたい。こつちの言葉は理解するし、何となく伝えたいことは分

かるんだけれどさ。それでも凄いんだよ。毒のある物とか、海を汚しているゴミとかを全部吸収して水を綺麗に出来るし、その度に強くなるよ。もう直ぐしたら飛行だって出来るらしいし、そうしたら宇宙で、ほうしやのー？ を吸収しに行くってさ」

まあ、その結果として僕に行き着いたんだから知っているけれど、怪獣が僕のお友達なんだから自慢したい。どれだけ凄いか語るのは楽しいよ。

「……有害物質を吸収する能力か。政府からの依頼が来そうだな。持ち運びが可能な反転術式を込めた物質も生成可能だし、これなら……」

あれ？ 先生、何で安心した顔をしているんだろ？ ひとくしけーは免れるだとか分からない事も言ってるけれど。

「ご苦労だった。君の今後について話し合うから少し休んでいなさい。傑、一旦寮の食堂にでも……どうした？」

「えっと、妓夫太郎達を創ったら眠くなつて……」

「では、私が背負い……あつ」

ハサンが僕を背負おうとしたけれど、横から鶴の尻尾が伸びて僕に巻き付くと背中に乗せる。ああ、少し臭いけれどフカフカで気持ち良いや……。

「……鶴さん。それは最初にお会いした時の仕返しですね？」

「うおっ!? ちよつ、目がマジだぞっ!? 大体、餓鬼相手に目がヤバいんだよ、テメエは！」

「仕方無いですから譲りますが……添い寝の権利は私が貰います」

「いや、俺は元から要らねえよ」

何か騒いでいるけれどももう限界。眠くつて……あつ、そうだ。

「これ、呪力をどれだけ吸っても吸いきれない奴なんだけれど、渡した方が良いつて童磨が言っていたから……お休みなさい」

僕は口の中から童磨と一緒に回収しにいった誰かの指の干物を夜蛾さんに渡す。何か騒がしいけれど、僕は睡魔には勝てなかったよ……。

……予想以上に友好的だったな。あれは通常の呪霊とは全くの別物と考えた方が良さだろう。

傑という前例が居るし、あの利用価値の高さならば上層部も大丈夫だろうが……別の意味で心配だな。

事前に話は聞いていたが、通常の呪霊と同じく負の感情より生まれたい個体や死者などが呪いに転じた個体と違って創られた呪霊達は随分とマトモだ。

あの生前は兄妹だったという二人も生前の人格を保持しているらしい。時代や育ちに問題が有ると言えば有るが、概ねこれで大丈夫だろう。

問題は……。

「おい、俺が宿儺の指が封印されている場所について尋ねた時、貴様は何と言ったか覚えてるか？」

「ああ、当然だとも。俺はちゃんと今現在封印されている指の場所には知らない」と正直に伝えたぜ。縛りも結んだが、それが無くても俺は正直な男だからな」

問題があるとすれば童磨だ。間違い無く此奴は信用するのを控えるべき相手だと俺の勘が告げている。特級呪物である宿儺の指を少年が渡して来た事について問い詰めるも悪びれもしない。

成る程、“既に封印は解いているから嘘ではない”とでも主張する気なのか。

「おいおい、俺ほど正直な呪霊は珍しいぜ？ ああ、そうだ。夜蛾殿が何を怒っているのか皆目分らないが、俺が何か気に障る事でも言ったのならお詫びにちよつとした情報を教えよう」

「……言ってみろ」

「ヘドラって実はメスなん、だっ!？」

言葉の途中で童磨を蹴り飛ばしたヘドラは出て来た口の中にもそのそと戻って行く。……本当に仲間からも嫌われているのか。

## 僕の今後

なあ、“さるかに合戦”って知っているか？ “かちかち山”は？  
“舌切り雀”や“花咲爺さん”だって日本じゃ有名だよな？

……最後に酷い目に合う奴をどう思った？ 猿や狸や意地悪で欲張りな爺婆共だよ。良い気味だったか？ 自業自得だったか？ 善人を苛めた奴は苦しんで当然だった？

ああ、大勢の餓鬼が昔から思っただろうよ。“この悪役は凄く酷い奴だ。悲惨な目に遭うのが相応しい悪人だ”ってな。

俺を生み出したのは古い絵本に籠もったそんな想い。沢山の昔話が収録された分厚くて古くて、今じゃ図書館の隅で誰も手を取らずに忘れられていた廃棄寸前の本。

餓鬼って凄くよなあ。数の力でただの絵本を呪物にまでしちゃうんだから。大勢で一人を襲っても、相手が悪役だったら構わないってんだからよ。

俺の名は“鶴”。弱つちい連中を虐げる力を持った十二鬼月の下弦が一体。……まあ、強くなったなら入れ替えだって有り得るだろうし、今は我慢しておいてやる。今はな……。

「うわっ！ 色々知識は得たけれど、この時代のお菓子って凄く美味いのね。あつ！ かき氷だって凄く安いんでしょう？ 食べてみたいわ！ お兄ちゃんも食べたいわよね？」

「俺は要らねえよお。んな事よりも食べかすをポロポロ落とすんじゃないよ。みつともないだろうお」

……例えば上弦になったこの兄妹。妹の方は主のリユックに入っていた菓子を貪ってるし、兄貴の方はそんな妹の口元を拭いたりと世話を焼いてやがる。

「こんなのが俺より上？ くっだらねえ。」

「ああ、主が安らかに眠って……」

そして俺と同じ下弦のハサンは力を使った事で眠っちゃまった主をソファーに寝かせ、自分は膝枕をしているかと思ったら頭を撫でて良いのか迷ってやがる。

他人にベタベタ触れるのが嬉しいらしいが、生前の記憶だの未練なんて物が存在しない俺にはちつとも理解不能だぜ。

「ああ、何奴も此奴も平和ボケしやがって。……ちっ！」

そろそろ雑魚呪霊でも狩りに行きたいぜ。弱い奴をいたぶるのは最高の気分なんだよなあ。出来たら善良なのが良いんだが、善良な呪霊なんざ居る筈が無いと思つた時だ。

弱い奴を虐げる事に特化した術式を持っている俺だからこそ俺よりもずっと上の呪術師の接近に気が付けたのは。

こりや墮姫と妓夫太郎よりも上だな。

「……ふくん。本当に呪霊を従えてるんだな。てかエツロい服装だな、おい。痴女かよ」

無遠慮に俺達をジロジロ見て来たのはガラの悪い白髪の男。墮姫の下着みたいな服装に反応した後で未だに寝こけてる主に近付くと手を伸ばした。

「おい、起きろよ、ガキンチョ」

揺すろうとでもしたんだろうな。肩に向かって手を伸ばし、眉をかめたハサンがその手を掴んで止めようとしたがギリギリで止める。

「……触れない」

「あつ？ おいおい、テメエ……」

なんかの術式で触れないらしいが、ハサンをちゃんと見るなり男は後ろに飛び退く。……成る程な。

此奴、触られない事は出来ても空気中の毒までは防げないって所か。俺は弱い奴を虐げる存在の集合体みたいなもんだから分かるんだよ。そういう弱みって奴がな。

「悟、その辺にしておけ」

まあ、流石にそろそろ止めるよな。あの夏油って奴が止めに入って白髪が動きを止める。主が目を覚ましたのもその時だった。

うわあ。凄く怖いお兄さんが居る。多分不良って奴だよな。

「お兄さんもこの学校の人？　僕は……」

「鬼邸だろ？　聞いてるよ。……確か加茂の所から千年近く前に独立した所だったな」

「かも？」

「ああ、無惨様が見限って出て行った家だよ。因みに彼は五条だね。多分六眼も持っているし、凄く強くなれるんじゃないのかな？」

「あつ、童磨」

何時の間にかやって来た童磨が怖いお兄さんの肩に手を回して頬を指先で突っついていているんだけど、どうして夏油さんは驚いた顔なんだろ？

「悟に触れているだど!?　無限を突破したのか!？」

「ん？　ああ、別にやりようは幾らでも有るんだ。実際……千年前の御前試合で俺が倒したし。まあ、結構ボロボロされたんだけどさ」

「テメツ！　気安く触れてんじゃねえよ！」

「おっと、危ない危ない。おいおい、俺は君と戦う気は無いんだから仲良くしようぜ？」

怖いお兄さんは童磨を振り払おうとするんだけど全然効いていない。呪力を込めた拳を顔面に叩き込まれても微動だにしていなかった。

「誰が呪霊と仲良くするかよ」

「誰も童磨とは仲良く出来ないと思うよ？」

「うわあ。俺って嫌われ者だ。何でだろ？　まあ、俺が何かしたんだったら……これで詫びにしてくれよ」

童磨は自分の顔面に拳を叩き込んだけれど、その瞬間に呪力が黒く

光って見えた。さつきお兄さんが殴っても直ぐに治る程度の傷だったのに今は肉が抉れて骨が砕けてしまってる。

「黒閃……」

「ああ、呪術師には狙って出せなかったんだっけ？ 俺はこの通り……楽に狙って出せるぜ」

童磨が机を指先で叩く度に呪力が黒く染まっているし、お兄さん達は更に驚いている。あれって凄いのかなあ？

「……とんでもないな。鬼舞辻無惨の従えた呪霊なだけあるという訳か」

お話が終わったのか夜蛾さんがやって来たんだけど、童磨が穴を開けた机を見ながら驚いてるし、

「きんぷつごっ。」

……誰の事だろ？

「それについては後々話すし、気になるなら其処の奴に聞けば良い。それよりも君の今後について一つ決まった事が有る。少し不便を掛ける事になるが良いか？」

「不便？」

……テレビとかゲームが禁止なら嫌だなあ。

「……まさか高校に住み込むなんて。暫くは小学校だってお休みかあ。……今週は好きなメニューが給食に出るのにさ」

あの後、夜蛾さんが告げた僕の今後ってのは夏油さんや怖いお兄さん……五条さん達と一緒に生活するって事らしい。転校とか僕が術式で作りに出した呪力や反転術式の込めた石とかの取り扱いで揉めるらしい。

ぜーいん？ とか、かも？ って所が欲しがってるらしくって、話し合いが終わるまでは寮に泊まって勉強だなんてさ。

「ならば私が作りましょうか？ お料理に挑戦してみたいですし」

「アンタって宗教上食べられない物だつて有るんでしょ？ 料理しちやつて大丈夫なの？」

「……あつ。えつと、メニューは何ですか？」

「すぎ焼き風煮」

「む、無理です……ごめんなさい」

そんなこんなで寮で過ごす僕達だけけれど、今はハサンと墮姫と一緒に居る。ハサンが僕と一緒に居たいってついて来て、妓夫太郎はテレビに夢中だから墮姫もついて来た。

「……おい、どうして其奴が此処に居るんだ？」

「すっげ」

「あつ、夏油さんに五条さん。なんかね、墮姫も広いお風呂に入りたいんだって」

そんな僕は今、凄く広いお風呂でハサンに背中を流して貰っているよ。

「何ジロジロ見ているのよ、童貞共」

墮姫は首を傾けて下から睨み付けて居るけれど……どーっていつて何だろう？

## 呪術師への認識

「うん。こんなもんで良いでしょ。昨日はチョコレートとピーナツツバターにしたから……今日はジャムとバナラアイスね」

トースターで焼いた食パン二枚を更に並べ、冷蔵庫の中を漁って目当ての物を探す。今の世の中って美味しい物が沢山あって困っちゃうのよね。えっと、ジャムはイチゴとマーマレードとブルーベリーの三種類が有るし、今日はイチゴにしておきましょう。

これで片方の準備は出来たし、もう片方はハチミツとバナラアイス。創示の奴がお土産に買って帰った箱入りのアイス、最後の一個をジャンケンで勝ち取って、昨日のお風呂上がりには食べないで取って置いたのを……あれ？ 無い？

「え？ 確かに昨日は有ったのに……」

もう既に口の中はアイスを乗せてハチミツを沢山つけたトーストの気分。今更別のにしたくない。それにしてもアイスに私の名前を書いていたのに何で無くなっているのかしら？

疑問に思っていたら後ろの方で誰かの気配。

「ねえ、私のアイス見なか……ああっ！」

「何だよ。朝っぱらから五月蠅い奴だな」

振り向いたら私の用意したトーストを食べている五条悟の姿があった、しかもテーブルの上には私の名前が書いているアイスのカップ。中身は無い。

「何でアンタが私のアイス食べてるのよ！ しかも私が用意したトーストまで食べてるし！ 人の食べ物勝手に食べるな！」

「人じゃなくって呪霊だろ、お前。別に良いじゃん、人間の食べ物は要らないんだから」

そう言って五条は私のアイスを一気に食べて、一人分だけ残っていたオレンジジュースまで飲み干した。早い者勝ちだからって早起きしたのに……。

「お腹減らなくつても味は分かるもん！ ……う、うう、うわああああああああああん！ 私のアイス食べたあー!! 楽しみに取っておいたのにいいいいいいいい！ お兄ちゃああああああああん！」

「うおっ!? お、おい、泣くなつて！ こんな朝っぱらから大声で泣いてたら……」

「……悟、朝から何をやっているんだ」

「テメエ、妹に何しやがったんだあ？ ほら、お前も泣くんじゃねえよ、みつともねえだろお？」

「あー、糞。ほら、傑とか五月蠅いのが来やがった……。マジで面倒臭え……」

「え？ 堕姫が泣いてると思ったたら五条さんがアイス食べちゃったの？ 二人共子供だなあ」

「小学一年生に言われるんだから悟の奴も情けないな。ああ、堕姫の方も見た目と違って中身は十三歳だっけ？ じゃあ未だ子供か。生きていた時代からして甘い物は貴重だったろうし、全部悟が悪いね」  
呪術高专に来てから一ヶ月、僕は東京の小学校に転校して、土日や放課後は呪術のお勉強をしていたんだ。今日は寝坊しちゃったから何があったか聞けなかったけれど、放課後に実地見学として夏油さんの任務に同行する途中で話を聞いていたんだけれど……困った人だなあ。

今は十六歳の女の子ばかり攫う変な趣味の一級呪霊を倒した帰りで、もう直ぐ車が待っている場所だ。

「じゃあ堕姫には帰りにコンビニでアイスでも買って帰ろうつと。はい、今日の分は終わったよ」

夏油さんは凄い呪術師だからお仕事が直ぐに終わるんだけど、終わった後で倒した呪霊を食べなくちゃ駄目なんだ。でも、其れが凄く変な味で、其れを知った五条さんは控えろって言ってたけれど、童磨が教えてくれた方法で解決したよ。

夏油さんがボールみたいにした呪霊を僕の術式の口の中に放り込んで夏油さんの呪力と混ぜれば食べなくても使役した状態に出来たんだ。何とか出来ないか訊いてみたらあっさり教えてくれたし、知っていたら直ぐに教えてくれたら良かったのに。

「助かった。じゃあ、アイスは私が代わりに買おう。勿論協力金とは別にね。他の子達の分も買おうか」

「やった！」

呪力や反転術式を込めた結晶やらヘドラを使った汚染物質の除去、十二鬼月の力を使つての呪霊退治。僕にも沢山お仕事が来ているけれど、子供に大金を持たせるのは駄目だからつて先生が管理して月々のお小遣いを其処から出してくれる。前より増えたけれど、お土産とかに消えるから助かった。

前に五条さんから従えてる呪霊にお礼するのは何故だつて訊かれただけれど、手伝つて貰つたんだからお礼するのは当たり前じゃないのかなあ？

「それにしても悟には困つた物だよ」

「童磨にもね。多分童磨の方が少し性格が悪いと思う」

「確かに。でも私は彼の話にちよつと興味が有るんだ。特に私と同じ術式を持った不死川玄弥つて男についてね。彼に起きた異変は私にとって他人事じゃない」

深刻そうにする夏油さんが童磨から聞いた人の最後は僕も知っている。呪霊を限界を超えて取り込んで、最後は半分呪霊になってしまったからつて仲間を追われる事になつたつて。

逃げた後、彼がどうなつたかは分かつていない。

「過ぎた力は身を滅ぼす、か。疲れる話だ」

「疲れる話つて言えば、僕つて最近呪術師の家の人と会つてるんだけど、思つていたのと違つて凄く疲れたよ。呪霊と人知れず戦うヒーローで、特撮の正義の組織みたいと思つてたら、刑事ドラマの上層部みたいでさ」

「……うん、そうか。私も君から聞いてから悟にも上層部や御三家について話を聞かせて貰つたんだが、呪いが見えない一般人を守る崇高

な使命の持ち主だつて認識が揺らいでね……創示君。君は呪術師はどんな存在だと認識しているんだい？」

「えっと、足が速いとか勉強が得意とかと同じかな？ 人より得意な分野が有るつて感じ。そんな人がする特殊なお仕事？」

僕の返事に夏油さんは黙り込んでしまふ。疲れてるっぽい。このお兄さん、凄く苦勞してそうだからなあ……。

「じゃあ、お休み。明日も学校だし早く眠りなさい」

「ヘドラが空を飛べるし、小学校の近くまで飛んだら駄目？」

「駄目」

コンビニでアイスを買つて貰い、僕の分は車の中で食べ終わつて寮に戻つて来たんだけど歯を磨いた頃には子供は眠る時間。明日の朝が辛そうだよ。

童磨に背負つて走つて貰うのは嫌だし、ヘドラならセーフ。

「じゃあ、お休みなさい」

ベッドに入つて電気を消せば真つ暗で今にもお化けが出て来そう。ちよつと怖くなつたけれど、ベッドに潜り込んで来たハサンが僕を抱き枕にするから安心なんだ。

ヒンヤリしていて柔らかくつて甘い匂いがするから安心する。

「ハサンが居るならお化けが出たつて安心だね」

## 禪院家の呼び出し

我食らう、故に我有り。この世の全ての害毒が私の糧であり、力の源。我を創造せし〃鬼舞辻無惨〃は性根が腐り果てた上限の式を除いた他の十二鬼月が消滅してから我を作り出し、力を与える前に封印を施した。

「次代に託せるのは一体のみだが、こうすれば何とでもなる。少々面倒な能力ではあるが私の後継者であれば使いこなせるであろう。もつとも、この世に貴様が使い物になるだけの害有る物がどれだけ増えるのか甚だ疑問では有るが」

人の心など呪霊たる我には不可解な物ではあるが、それでも無惨なりに親族である後継者への愛情が込められているのだろうし、それが常人とはかけ離れた呪術師の価値観と照らし合わせても歪な物だとは理解可能だ。

しかし、使い方が悪い故に無惨な結果に終わるも物自体は悪くない奴の頭でも予想は出来なかったか。千年もの間に人の営みによって世界は汚され、更に空の彼方に行けば強き毒が太陽から発せられている事を。

成る程、奴は確かに創造主ではあるが……私は後継者である今の主の為に生まれた存在であり、育てたのも今の主だ。ならば唯一無二の主は今の主である。

……特にあの性悪と共通項目を増やしたくない訳では多分無い。我、考えるのは苦手である。

そんな私の趣味は外の世界を覗き見る事。上弦に与えられる個室だが、その中身は持ち主に左右される。妓夫太郎達の様に呪物に宿った呪力を元にした事で人の記憶を持ち合わせる場合は生前の住処に似るらしく、それなりに整った女郎部屋と荒ら屋が障子で区切られていると聞いた。童磨のは……聞きたくないから他の事を考えていて

知らん。

私の場合は濁った水。全身をゆったりと浸かれる程の広さと深さを持ち、食事の時以外はずっと部屋に籠もって僅かに開けた入り口の隙間から外を覗き見るのが日課だ。

だが、今見ている光景は面白くも何ともない。禪院家とやらに呼び出しを受けた主が保護者である狛治と共に大きな屋敷に向かい、上から目線で頼み事をされている。

「呪力の底上げ？ えっと、無理……かなあ？ 僕の術式だと呪力の器は大きく出来ないから。その子の天与呪縛が呪力が少ないって以外なら少しはどうか出来たと思うけれど……」

昼日中から酒臭い男の後ろに控えた双子の少女。どうも呪術師の御三家の出身の割には呪力が乏しいらしく、主の術式でどうにかならないかと頼まれたのだが、そもそもそんな事態に陥ったのは童磨の仕業だ。

「確かに術式の書き換えとか追加は出来ないけれど、体質とかは変えられるぜ。現に無惨様は死産だと思われた上に何度も病気で死に掛けた位に病弱になる天与呪縛を持っていただけだけど、呪力の結晶化の応用でどうにかしたんだ。それで多少呪力の出力は下がってしまっただけだよ」

資料が残っていない故に長らく側で仕えていた奴に行われた尋問。呪力や反転術式の結晶以外にも利用価値がないのかと色めき立った上層部に童磨が告げた言葉。

利用価値を示すのは悪い事では無いが、そのせいで主は大忙しで私の食事さえ回数が減った。最初は呪霊からの情報や天与呪縛によって得られる呪術師としての能力を惜しむ者も多かったのだろう。

結局、偽名で接触を図って来た小僧の縛りの一部をどうにかして広大な呪術の範囲を狭めた事で今回みたいな面倒な事に繋がった訳だ。

確か“ファイナルフォームメタル之助”だの“パーフェクトマシン太郎”だの名乗って居たが、主と少し仲良くなったのは良きことだ。無惨には友達が居なかつたらしいからな。

「うーん、まさかお見合いまで勧められるだなんてさ。先生が加茂家との兼ね合いを出してくれなかったら困る所だったよ。あのオジさん、凄くお酒臭かったしさ」

急に呼び出しを受けて向かったお屋敷だけれど、僕は近付いただけで嫌な予感がしていたんだ。だってさ、呪術師って呪霊の元になる呪力が殆ど漏れないのに……あの屋敷じゃ凄い事になってたんだよね。最近はお呪物とかから吸い取ったり心霊スポットを回って呪力を集めても殆ど回収されちゃってたのに、一応許可を取って吸い込んだら十分な量が集まった。

殆どが他人と自分を比べるって感じの内容で、あの女の子二人にそれが向けられていたんだ。

まさか会って初日で結婚を勧められるとは思わなかったよ。先生が断ってくれて良かった。だって僕じゃ何って言えば上手に断れるか分からないもん。

「それが保護者である俺の役目だ。出来る範囲でお前を守るさ。……特に禪院家は面倒な家だ。仮にお前が一員になったとして、子に術式が継承されなければ呪力も今までと同じく一切剥奪されるだろう」

「はくだつ?」

「奪われる、という意味だ。まあ、関わらずに済むなら関わらない方が良い。じゃあ帰りの新幹線まで時間があるから甘い物でも食べてお土産でも選ぼう」

「うん!」

ああ、帰るのが楽しみだな。新しいのを創り出す時は呪術高専で夜蛾さん達の前でって約束だし、今すぐ新しい子に出会えないのが残念だなあ。

「えっと、夜蛾さんに夏油さんに五条さんに……七海さんもだね。昨日は堕姫が迷惑かけちゃったし、お仕事大変だろうから」

僕のお友達の十二鬼月だけれど力が凄いからって最近夏油さん

達学生の任務に同行しているんだけど、普段は女子寮のお風呂を使えって言われてる墮姫が面倒臭がつて男子寮のに入っちゃったんだよね。しかも次の日に一緒にお仕事に行く予定の七海さんが遭遇して鼻血出して卒倒しちゃったしき。

「大人になるって大変なんだね」

「うん？ そうだ。だから子供の内は沢山遊ぶ事だな」

「そうだね」

「勿論勉強もだ。算数のテストが休み明けに有るんだろう？」

「……そうだね」

うーん、先生には敵わないや。所で……。

「先生は天与呪縛をどうかしないで良いの？」

先生にも二つの天与呪縛が存在する。呪霊が見える程度まで少なくてされた呪力と呪具が使えないって縛り。その代わりに凄い身体能力と武術の才能を得たらしいんだ。

「いや、俺は構わない。呪霊への対応は無理だが、他の相手と戦うには今の力が必要だからな」

「童磨を殴れるよ？」

「……いや、良さ。誰かを殴る為という理由でお前を守る力を……彼奴は」

言葉の途中で先生は人混みに視線を向ける。あの口元に傷があるオジさん、呪力が全然無いなあ……。

所で先生、少し迷ったよね？

## 同行者

「いやいや、悪いね歌姫ちゃん。任務の最中に缶ビールなんて飲ませて貰って。大人として情けないし、仕事は頑張ろう。夏油殿達に比べれば下の下である歌姫殿には俺なんぞの助けなどは不要だろうが」

「五月蠅いから酒でも飲んで黙っていろって言った筈よね？ 理解していかないのかしら？ それと馴れ馴れしく呼ぶなっての！」

「縛りをちゃんと結んだのか確認しないのはいただけないかな？ それじゃあ後輩にどんどん差を付けられるだけだ。弱いなら弱いなりに……おっと、危ない。殴って来るだなんて酷いなあ」

あの子供が呪術高専に保護されてから1ヶ月近くが経過した頃、従えてる特級呪霊が生徒の任務に同行する様になった。ええ、それは別に良いわ。ちゃんと縛りを結んだ上で手助けをするのは助かるし、危険な任務で経験が積めるもの。

でも……。

「なんで私に同行するのがアンタなのよ！」

「それは上に言って貰わないと。俺は命令に従っているだけだしさ」

よりにもよって私に同行してるのは性格がひん曲がった糞野郎。ヘラヘラ笑いながら煽って来る上に任務中に自販機でビールを買い込むとかどうなってるの！

……あの反転術式の結晶が出回ってから硝子も任務に出る回数が増えたけれど同行している呪霊の性格は悪くないらしいし、本当に此奴だけは勘弁して欲しいわ。

大声で怒鳴っても聞き流されて、どうせ聞かないと分かった上で殴っても避けられる。ヘラヘラヘラヘラと何処かの馬鹿と同類ね。……いや、流石に此奴と同じ扱いは悪いわ。悟が糞なら此奴は糞のどぶ川煮込みに生ゴミを添えましたって感じだもの。

「……童磨様が申し訳ありません」

「良いわよ、アンタは気にしないで」

童磨の言動に申し訳無さそうにしているハサンを見ると本当に呪いなのかって思えて来るわね。呪いに転じたら理性がぶっ飛ぶ

のが普通なのにこの子やらあの兄妹は記憶も人格もそのままだし……。

しかし本当に良い子ね。何時もは創示君にベツタリと引っ付いて  
いるけれど仕事熱心だし、この前は情報収集のミスで遭遇した二級呪  
霊を息を吹きかけたり触ったりするだけで毒殺したし、矢つ張り特級  
呪霊だなんては思うけれどさ。

マジで童磨とは天とマントル内部位の差だわ。

「アンタってマジで元が人間じゃないって感じよね」

「ん、そうだな。俺は寒さに対する畏れから誕生した呪霊だし当然だ  
ろう？ にしても俺って嫌われてるなあ。よし！ 此処は面白い話  
をしてあげようか」

「いや、結構だから」

「童磨様だけが面白いと感じても無意味かと」

童磨が言う面白い話なんて信用出来ないわ。それなら悟が真面目  
な口調で改心したって言うのを信じるわよ。どっちも絶対に有り得  
ないんだけども。

「いやいや、当時の呪術協会が自分達の無力を晒してまでも秘匿した  
事だぜ？ あの呪いの王と呼ばれた両面宿儺、彼はどんな呪術的だっ  
て敵わないとされていたのは知っているだろう？ 無惨様は臆病だ  
から勝てる可能性があつても戦わなかつただけけれど、そんな両面宿  
儺を一人で退け生涯残る傷を与えた男が居たんだ」

「はあ!? いや、だってどんな呪術師だって歯が立たない最強の呪詛  
師だったじゃない。それこそ指に千年以上呪力が残ってる程の。そ  
んなの誰が退けたって言うの!？」

「侍だよ。それも年老いた上に呪力なんて殆ど持たず、天与呪縛さえ  
も与えられていない土分なだけの一般人さ。武器だけが辛うじて四  
級呪具に分類される刀だったっけな。彼は強かった。生まれつきの  
縛りなんて持たないのに誰よりも強かった。……まあ、家族とは若い

内に死別したそうだけれどさ」

「……あれ？ これって私が知らない方が良い話を聞かされているんじゃないかしら？」

「ちよ、ちよつと待ちなさい！ これ以上は……」

「名前は縁壹、継国縁壹。まあ、呪術師達からすれば到底敵わない相手を刀一本で返り討ちにした侍だなんて存在を許せないよね。徹底的に存在を無かった事にしたよ。もしかしたら上層部は知っているかもね。ほら、新たに知る者を出さない為にもさ」

「それは！ 私が！ 狙われるって話でしょ！」

「駄目だ！ 此奴、マジで嫌いよ！ ……私、大丈夫よね？」

「おっ！ 今回の討伐対象が出て来たよ。うわあ、理性が薄いタイプだね。じゃあ、俺の手助けは要るかい？」

「ネンゴウガ、ネンゴウガカワツテル！」

「誰がアンタの力を借りるかっての！ 大人しく見学してなさい！」  
姿を現したのは三級の中から上辺りに分類される呪霊。幾つもの腕が全身から生えている上に急所の頭に巻き付いて護っているけれど、この程度ならどうとでもなるわ。

「ウロ……」

「うっさい黙れ！」

よし、此奴で憂さ晴らししましょう。……どうせなら悟の方に此奴を付けなさいよね。

「……ちっ！ 全然発動出来ないわ。硝子とかの説明を聞いても意味不明だしよ」

「ケケケ！ お得意の無下限術式も常時発動は自殺行為なんだって？」

そりゃ反転術式を会得したいよな。例外的な使い手だったあの女だけでなくて七歳の餓鬼でさえ使えるんだしよ」

「うっせえ。テメエも一緒に被うぞ、鶴。大体、あの餓鬼の才能は代償

として千年間呪術師を一切出さなかった結果だろうか」

あの餓鬼が従える特級呪霊が任務に同行するのは別に良い。面倒臭い時は押し付けてサボれるし、数が多い雑魚の相手には人手が必要だ。だが、同行するのがこの性悪だったのが気に食わない。

「もつと他のが居ただろ。あの兄妹とか、僕に同行してる人形と珍獣とかよ。ああ、あの小動物はテメエより上だっけか？」

「ああんっ？ 必死抜いて反転術式の糸口も掴めてない奴が何言ってるんだ？」

「……よし。祓う」

上層部の腐ったミカンの嫌がらせなのか俺に同行してるのは鶴だ。正直言つて性根が腐ってるにも程があるし、他のにして欲しい所だけ睨み合つて呪力を高める。確かに此奴は並の特級よりは上だが術式は格下相手に特化した物だ。確か滅したら一つ椅子が空くだけだつて話だし別に良いだろ。

いい加減に我慢の限界が来ていたし、反転術式も思ったよりも会得が難しいから八つ当たりの相手が欲しかった所だ。……まあ、流石に完全に祓うと後が面倒か。

「んじゃ、ちよつと手加減して……つと、お客さんかよ」

突然足元で咲き乱れる色鮮やかな花畑。其れと同時に出て来たのは右の脇腹を大きく抉られた状態だつてのに殺意を向けてくる顔から木を生やした特級呪霊だった。

確かあの餓鬼が一部を食らったけれど取り逃がしたつて奴だよな、此奴。

## 愚か者

今回の任務は妙に呪霊が発生してるところって場所の調査だった。どうせ呪物でも有るんだろうし、それを破壊してさっさと終わる筈だったんだがな……。

「あの餓鬼の術式、矢っ張りえげつないな、おい」

簡単な任務の筈が突然現れやがった特級呪霊。あの糞みたいな性格の特級呪霊が逃しやがった三体の内の一で、仲間からは花御って呼ばれていたらしい。

認めたくはねえけれど千年前、つまりは呪術の最盛期に生まれた特級呪霊の童磨の實力は確かだ(戦ったら俺が絶対勝つが)、其奴が言うには宿儺の指換算で八本辺り。本来なら少しは楽しめそうな奴だが、今はだいたい弱ってやがる。

脇腹を大きく抉る傷跡。再生速度が反転術式の比じゃない特級呪霊が治せてないって事は余程消耗したって事で、それは彼奴の術式の仕業だ。

術式・十二鬼月。基本的な技は空中に生み出した口で呪力を食うんだが、要するに呪力で構成された物なら呪力だろうが喰っちゃまうし呪具だって呪力を食い尽くされたら只の武器になっちゃまう。ましてや呪力の固まりである呪霊なんざ頑丈だろうが関係無い。魂ごと食い千切られて終わりだろうぜ。

てか、本当なら童磨の力で倒せた筈だろ。さては回復させて二度食いさせる気だったな、あの野郎。お陰で面倒な事になっただろうがよ。

「ひやははははは！ 矢っ張り楽しいな！ 弱い奴を虐めるのは楽しいな！」

『ぐっ…！』

そんな花御だが、あんな餓鬼を襲っちゃまっただけでも運が無いのに、遭遇した他の手下の中でよりもよって鶴に出会うなんて運が無い奴だ。

まあ、俺は適当に見学で楽しませて貰うけどな。

『力が抜けて行く……？』

「そりゃそうだ。俺の術式の力は、自分より弱い奴と弱った奴を弱体化させる。だからな。おっと、術式開示で威力増加か」

既に特級じゃなく一級程度に弱まった花御を鶴はいたぶりながら戦ってるし、遊んでやがるな。 “ 物語の悪役に対する嫌悪 ” を元に生まれただけ有るな、彼奴はよ。

「……にしても弱ってるのになんで襲って来たんだ？」

さつさと終わらせて調査も終わらせたいと思つた時に一つの考えが頭を過ぎる。おい、まさか此奴は……。

「おい、其奴は足止めだ！」

仲間だつていう残り二体の特級呪霊、火山頭と蛸みたいな奴がこの先に居るんだ。しかも此奴より弱ってるな。

「ああ？ んじゃ、お前が先に行つて来いよ。俺は此奴と遊んでるか  
らよ。……領域展開・『御伽奇譚・悪童之宴』  
おとぎきたん・あくどうのうたげ」

……いや、マジ？ 彼奴つて領域展開まで使えるのかよ。

周囲の風景が一瞬で塗り潰される。床や壁、天井にさえ穴が開いたボロボロの社。空は暗雲に覆われて日の光は差さない。それに妙に獣臭くて不愉快だ。

「ひやははははは！ 俺様は解除が苦手だから此処から出るのは大変……何でテメエが居るんだよ」

「いや、俺が先に行く前に展開したんだろうが、ボケ」

「うっせえ、ノロマ！ さつさとしておけば良かっただけだろうが！」

計らずとも時間稼ぎに協力させられちまつてるじゃねえか。こうなったら速攻で倒して解除したら直ぐに追うしかねえ！

『これは僥倖。感謝しますよ、愚かな……いえ、凄く愚かな子達よ』

「うつせえ！」

結論から言えば花御を倒した後で拠点らしい場所は見つけたんだが残りには逃げられていた。まあ、幾つか呪具だの呪物だの残していたのを回収したからセーフだな。……夜蛾が五月蠅いだろうがよ。

「てか、俺達が来た切っ掛けってこの呪物とかだよな？ 古いのが結構あるけれどコレクターでも居たのか？」

「そんな連中に凄く愚かって馬鹿にされた俺達って……」

「忘れる！」

「よう。久し振りだな、“呪詛師狩り”」

「……そうだな」

今回はちよつとした様子見の予定だった。最近呪術師の間で出回っているゲームの回復アイテムみたいな結晶。それを作り出せる術式を持つている餓鬼を浚うか……最低でも殺すかって依頼だったんだが、前金貰う前に来て良かったな。

……呪力を一切持たない代わりに研ぎ澄まされた五感で感じた最高にヤバい気配。餓鬼が強い呪霊を連れてるって話だったが、ちよつと情報が足りないだろ。空に僅かに開いた空間の隙間から外を観察する巨大な赤い目。鼻の中が痛くて泣きそうになる程に強烈な刺激臭。ありや俺でも死ぬレベルの毒持ちだ。

餓鬼を殺したりパニックになられたりして暴走でもされたら国が終わるだろ、ありや。あんな餓鬼をよく飼ってるぜ。

「……お前か」

その餓鬼を連れてるのは昔はダチだった男だ。呪霊を何とか見られる程度の呪力しか持たない代償で得た力は俺より遥かに下だが、元々の肉体自体が異常に強い上に格闘センスだって抜群。確か恋人が出来た時点で呪詛師相手の仕事から窓に変わったんだっけか？

「……何の用だ」

「久し振りだったのに態度が悪いな。まあ、既にダチじゃ無いからだ

がよ」

確かに此奴と俺はダチと言える関係だった。あの糞みたいな家に居た頃は組んだ事も何度か有った位だ。だが、それも昔の話。

俺は狛治の名前を呼ばないし、向こうも俺の名前を呼ばない。それで良いだろ。

向こうは俺を警戒してか餓鬼を庇うようにして立つ。……写真で見せられた恋人に少し似ているな。いや、結婚したんだっけか？ それに確か元々の名字は……ああ、成る程ね。死んだカミさんの身内か。

「警戒しなくても大丈夫だ。俺は割に合わない仕事はしない主義だからよ。今回の仕事は受けねえよ」

「そうか。……おい、甚爾」

「名前で呼ぶな。俺とテメーは既にダチじゃねえんだ」

狛治が何か言おうとしたが俺はそれよりも先に人混みに紛れて消えて行く。つたく、カミさんが死んでから随分と腑抜けになってた癖に昔に戻った感じだったな。

「……家族ねえ。そっぴや俺の餓鬼って名前何だっけか？」

自分が名付けたのは覚えてるんだが思い出せない。まあ、思い出せない時点で俺にとって大した価値は無いって事だな。

前に見た幸せそうな狛治の顔が浮かび、続いて俺の餓鬼を抱く女の顔が浮かぶ。タバコを一本取り出して吸っていると今回の依頼主からの連絡が来ていた。

「……おう。ちよつと見たが話よりヤベエ餓鬼だ。出回った物を掠めとる方が楽だなありゃ」

前金は惜しいが割に合わない仕事だ。金が無いが諦めるか。……俺の餓鬼は何処に住んでたっけな。

「ねえ、あの人って……」

「俺の古い知り合い……いや、友人だ」

## 人形と小動物

小学校がお休みの日は先生に武術の特訓を付けて貰ったり童磨に術式について学んだりしているけれど自由な時間も結構有るんだ。

「暇だなあ」

「暇なのは良いことだろうが。俺の生前なんて忙しかったぞお」

「あつ、お兄ちゃんったらテリヤキばかり食べてる。最後の一枚は貰うからね」

テーブルにピザとかハンバーガーとかを並べて映画のDVDを観賞するんだけど、時々ハサンが後ろからギョツとして来て耳と目を塞いで来るから見えないシーンも有るんだ。主に男の人と女の人が抱き合ったら直ぐに。

「・・・これ、五条さんからお借りした映画ですよ。さつきからどうもラブシーンが多いですが・・・」

あれ？ ちょっと不穏な感じだ。僕を膝に乗せてお腹の辺りをギョツとしているハサンのお顔を見れば目が笑ってない。五条さんが面白いからって貸してくれた映画は難しいし、部屋で絵本でも読もうかな？

貸してくれたには五条さんには悪いけれど僕には退屈だし部屋に戻ろうとした時、耳元に電話の受話器が現れた。ダイヤル式の黒電話の物で、小さな女の子の声が聞こえた。

「私メリーさん。今、アナタの後ろに居るの」

続いてクスクスと笑う声も聞こえて、振り向けば女の子向けのお人形が宙に浮いていて、表情が人間みたいにコロコロと変わっている。

「あつ、お帰り、メリーさん」

「えー？ もう少しビツクリしなさいよ。私、メリーさんよ？ 特級仮想呪霊なのよ？」

その目には下弦の二文字が刻まれていて、僕の反応に不満そうにして自分と同じ大きさの工作バサミを振り回している。特級呪具と同じ位の呪力を感じるんだけど見覚えが。あつ！

「ねえ。そのてんとう虫のハサミって僕のお道具箱から消えた奴じゃない？ もー！ やっぱり君が持ち出してたんだね。わっぷー！」

返して貰おうと手を伸ばしたらモフモフした白い毛玉が乗って来て、僕の顔に乗ったら次はハンバーガーに手を伸ばしたら墮姫の胸を経由してテーブルに乗るとシーフードピザの最後の一枚に鼻を近づけて匂いを嗅いでいる。その姿はリスか猫かうさぎか何だかよく分からない姿で、目には上弦の文字が刻まれていた。

「フオーウ」

「こら、フオーウ！ それはアタシのピザなんだから食べるんじゃないわよ！ アンタだつて報酬貰っているんだから自分で買いなさい」

「いや、オメエだつて俺に奢らせただろうがよお。それは別に良いんだが、少しは節約しろよお」

墮姫から伸びた帯に絡みつかれて足をバタバタ動かしているのはフオーウ。フオーウフオーウ鳴いているからフオーウで、集めた呪力を殆ど持って行かれたからメリーと一緒に此奴を作ってから他のを全然創れていないんだよね。

「夏油さんもお帰りなさい。メリーとフオーウのお守りは大変じゃないかった？」

「いや、大丈夫……かな？ メリーの探知能力は凄いいし、フオーウの能力も便利だ。正直言えば譲って欲しい位かな？」

「えっと、駄目かな？」

メリーさんは人形供養で集められた人形に宿った呪力で創り出した呪霊で、能力も有名な怪談話に則した物。狙った相手の居場所を察知して、電話と共に背後に転移する。フオーウの方は……五条さんの目でも複雑で分からないって言った。

「まあ、私は私で便利な呪術の使い手を捜すよ。童磨から教わった極之番の能力……集め直すのが面倒なのが玉に瑕なんだけれどね。それにしてもよく食べるな……」

夏油さんが視線を向けたテーブルの上にはピザやハンバーガーの大量の空き箱とか包み紙、ポテトチップスだつてスープに売ってい

るのを全種類（七海さんに買って来て貰ったらしい）。

「別に良いじゃない。遊女のご飯って酷い物だったのよ？ 古い漬け物にオジヤだけとか、連日ご飯抜きとか。それで忙しいし、お兄ちゃんなんて虫やネズミを食べてたし、その点現代は美味しい物や娯楽が沢山あって最高ね」

僕が思うに十二鬼月の中で今を一番楽しんでいるのは堕姫と妓夫太郎だと思う。二人して色々と買い込んで毎日みたいのパティーを開いているし、妓夫太郎はテレビに、堕姫はゲームに熱中しているんだ。でも、お金の殆どをつぎ込んでいるから美味しい物は妓夫太郎に買って貰っているらしい。

「ああ、同行で出る報酬は創示君に振り込まれるけれど、その殆どを渡しているんだったな」

「え？ だって僕は働いていないし、他の事でお金は貰って先生に管理して貰っているし。ゲームだって堕姫が途中で投げ出したのとかパーティーゲームは僕もやっているしや」

「まあ、君が良いのなら……わわっ!？」

「フオウ！」

帯から抜け出したフオウは夏油さんの肩に飛び乗り、壁に向かって飛ぶとそつちも蹴って勢いを付ける。その時、扉を開けて姿を現したのは童磨だ。

「やあ！ 皆揃っているね。ちよつと興味深いニュースがあつて……」

「ドーマシスベシフオウ!!」

「ぶへらあつ!？」

回転を加えて更に威力が上がった懇親の渾身の蹴りが童磨の横顔に命中、僕が正の力で殴っても平気な顔をしている童磨が吹っ飛んで目を回していたよ。

「……私は君の呪霊に関しては一般的なのとは感じる物が違うんだ。悟もそうだと思うのだが……彼奴に関してはあるの姿に胸がスツとするな。人の姿をして人格があるように思っても、彼奴は……」

「うん、性格が悪いよね。じゃあ僕は絵本でも読んで来るよ。行こう、

ハサン」

「ええ、好きなのを私が読みますよ」

立ち上がって部屋に行く僕にピツタリと引つ付きながらハサンも歩く。所で童磨が言おうとした興味深い事って何だろう……？

「そして二人は幸せに……あれ？ お休みですか？」

「うん、眠くなって来ちゃった……」

ベッドに寝ころんでハサンに絵本を読んで貰って居ただけけれど少し眠たくなって来ちゃった。僕が目を閉じたらハサンは何時もみたいに抱き締めて、冷たい体温と甘い香りで落ち着いた僕はそのまま心地良い眠りに……。

「短い期間によくぞ成長した。流石は私の後継者だけあるな。誉めてやろう」

「……ええ」

目を開けると其処は不思議な建物の中。目の前には満足そうに笑みを浮かべる無惨が立っている。……気分が最悪だよ。

「いやいや、フォウは酷いね。他の皆も助け起こしてくれても良かったんじゃないのかい？」

「ヤツフォーウ（特別意識・死んでも凄く嫌）」

「嫌よ」

「まつぴらごめんだなあ」

「私メリーさん。貴方を助けに行かないわ」

「私もごめん被る」

「酷いなあ。俺でも少しは不愉快に思うんだぜ？ ……折角俺が禪院家の殆どが殺されたってニュースを知らせに来たのにさ。多分明日

から忙しくなるぜ」

## 頭無惨

「俺は悪くない。俺は悪くないんだ……」

とある男が酒に酔ったのか真っ赤になった顔でハンドルを握りながら呟いていた。バックミラーにはサイレンを鳴らしながら制止を促すパトカーの姿が映り、彼はそれから逃れる為にアクセルを強く踏み込むのだが、酔っている上に慣れない車に久々の運転というのもあつて危うい走りだ。

「こんな事になったのも全部彼奴が悪いんだ！」

数年前、彼はそれなりに大きい剣術道場の後継ぎだったのだが、(酒を飲んでから)車で出掛けた時、前をフラフラと歩いていた女性(但し横断歩道の信号は青)を跳ねてしまった。相手の過失を主張するも聞き入れられず、理不尽に思った彼は自らの無罪を信じて逃走、(盗みを繰り返して)各地を回った先で立ち寄った居酒屋から出た後、(他人のバックに入っていた車のキーを使い)車に乗って出た所を警察に呼び止められて逃走劇が始まった。

そして最後にハンドルを切り損ねた彼は反対車線を走っていたトラックの前に出てしまい、その生涯を終えた。

だが……。

「そう……だ。俺…俺は悪くない。ひいひいひいひい！ どうして何奴も此奴も可哀想な俺を虐めるんじゃー！」

炎上した車から這い出して来たのは額に大きな瘤を持つ老爺の姿をした呪霊。この直後、追跡していた警察官は無残な死体で発見される事となる。

「……以上だ。次に私が現れる迄に試しておくように。そうだな、例

の狛治とやらで試しておけ。奴ならばそれなりの結果となるだろう」  
折角の良い気分でのお昼寝の最中に夢に現れた無惨は極之番を僕に教えると満足そうにして消えて行く。僕としては使いたくない内容だったんだけど、僕が使うのは当たり前前って疑っていない。

「ほほう。不満そうだな？　よく聞け。私の言葉に従っていけば貴様は呪術師として成長出来る。私すら越え、あの忌々しい呪いの王さえも相手にならぬ事だろう。成長に免じ此度の不敬は特別に許してやるから精進せよ」

これで二度目の対面だけれど、童磨以上に嫌いになれそうだよ。この人と結婚したご先祖様は凄く苦労したんだなって思っていると視界が揺れる。多分僕は目覚めるんだろう。それにしても千年も経ったら見た目が全然違う……あれ？

よく見れば無惨の右腕の指が途中まで消えている。さっきまではちゃんと有ったのに。

「ああ、これか？　今の私は己の呪力で術式に記憶と人格を刻んだが、使えば消耗されるのは当然だろう。これも血を分け、術式を引き継がせた子孫の為だ。会える回数には限りがあるが、その間は精々私に感謝するのだな」

そんな風に言つて姿を消すけれど、そもそも人質に取られない為に家族を消すとか、今回みたいに碌でもない技を身を削って伝授するとか、子孫への思いやりは確かに存在するけれど、その方向性が絶対に間違っている。童磨も言っていたけれど、本当に無惨な頭をしているなあ。似なくて良かった……。

「んっ……」

「お目覚めですか？　今、高専内は騒がしくなっていますし、少し部屋でノンビリしましょうか」

僕が起きるとハサンがギュッと抱き締めて顔を胸に押し付けている体勢だった。流石に恥ずかしいから後ろを向くんだけど、体の向きは変えられても腕から抜け出せる程には弱くない力だ。確かに外

が騒がしいし、忙しいなら邪魔しないように大人しくしてようか。

「ゲームでも一緒にする？　堕姫が買ったけれど五条さんと夏油さんにポッコボコにされたからって泣きながら貸してくれた奴があるし、練習して今度は二人を倒さない」と

「ええ、ご一緒します」

抱き枕にされた状態から解放された僕はゲームの準備を終えるとハサンの膝に座る。もう定位置になっちゃったな。それにしても本当に何が起きたんだろう？

「はっ！　御三家って呼ばれてた癖に情けないなあ。弱いんだなあ」  
童磨の奴から聞いた話じゃ随分と恵まれた連中だったって話じゃねえか。俺も堕姫もその連中には創示を利用したいって奴程度にか思ってたが、被害状況に笑いが出て来る。

「外出中の当主を除き、下っ端の呪術師まで全滅、生き残りは倉に閉じこめられていた双子の女の子と使用人。財産やら呪具も結構持ち出されたらしいぜ。世の中には酷い事をする奴も居るんだな。俺には想像も出来ないぜ」

「いや、アンタなら平気でしそうだがなあ」

まあ、今後は呪術師界で暫く混乱が起きるだろうし、呪霊だの呪詛師連中の相手に俺達まで忙しくなるかもな。まあ、創示の奴経由だが貰えるもんが貰えるんなら俺は構わねえよお。人間の頃と違って美味いもんは沢山食えるし、興味深い事も沢山有るしなあ。

「おっ！　そーいや昨日テレビで観た映画の続編が公開するんだよなあ？　堕姫、見に行かねえかあ？」

「うーん、私は好みじゃ無かったし、別の映画にしておくわ。でも私達だけで出掛けると五月蠅いし……歌姫でも誘おうかしら？　適当な任務をパパって終わらせてさ。ポップコーンとかも楽しみよね」

「そうか。……しかし本当に良かったなあ」

今の妹の姿を見て心の底からおもう。梅の奴……墮姫は染まりやすい奴だから俺のせいで随分と気性が荒くなっちゃったし、そのせいで客の目玉を潰して焼き殺された。だがよ、今じゃ人間辞めて化け物になったのに毎日が楽しそうだし、頭が足りなくて我が儘なままだが人間の頃よりずっと良い。

「良かったって何が？」

「……気にすんなあ」

まっ、わざわざそれを言うのは俺らしくないから絶対に言わないんだがよお。忠義なんてもんはねえが、あの小僧の為に動いてやろうって少しは思うぜえ。

「フオウフオウー！」

「こらこら。あんまり俺を蹴らないでくれよ、フオウ。結構痛いんだぜ？」

校内は随分と騒がしくなってやがるが、その知らせを俺達に持って来た奴はフオウの野郎にテシテシって感じに蹴られ続けてやがる。彼奴、本当に嫌われてるよなあ……。

「まあ、暫くは学生も忙しくなるだろうね。そのせいで只でさえ任務で減ってる一般的な座学の時間が減るんじゃないのかな？ それにしても未熟な子供を動員しなくちゃ手が足りないって呪術師界隈も大変だよな」

「座学かあ。私も算数と国語と一般常識は学べって言われてるけれど忙しいなら受けなくっても良いわよね？ ずっとゲームしていたいし」

「駄目に決まってるんだろがよお。お前は少し頭の使い方を学べよお」

「そうだぜ？ もう直ぐ天元が体を新しくする時期だし、今の内に学んどかないとき。……もしかしたら上弦の壺になるだろう“彼”の出番も有るかもね」

「ああ、あのお爺ちゃんね。いやいや、それはないんじゃないの？ 私

とお兄ちゃんが居ればだいたい大丈夫よ」

「さて、どうなるだろうね」

……また面倒そうな事言つてやがる。勘弁して欲しいぜ。

## ガラスのハート

本当なら暑くなる頃なのに呪術高専の校庭が氷漬けになっている中、無傷だけれど全裸の五条さんが膝を付いて落ち込んでいる。そんな姿を眺める僕は堕姫に腕と帯で背後から抱っこされていて、横ではハサンが怖い顔で堕姫を見ていた。

えつとね、どうしてこんな事になったのかと言うと、僕が小学校から帰ったら凄く寒くて、何だろうって思ったら童磨が五条さんと戦っていた。

「……何をやってるんだ、彼奴は」

車で迎えに来てくれた先生も呆れているけれど、校庭の端の方で巻き込まれない様にしながら堕姫とハサンと妓夫太郎と夜蛾さんが観戦しているから本気じゃないんだろううけれどさ。

「ねえ、五条さんはどうして戦っているの？」

「何でも反転術式が使えない事を童磨にからかわれて、戦いの中で覚えるって感じで戦ってるんだって。ほら、アンタもこつちに来なさい。アタシが寒さは防いでやるから」

堕姫に手招きされて膝の間に座るとハサンが何時もやるみたいに腕で抱き締めた上で帯で包み込んでくれた。うん、これで寒さは防げるや。

「そうなんだ。僕、てっきり同族嫌悪で喧嘩しちやっただのかと思ったよ」

「……悟の奴も性格は悪いが、童磨と一緒ににはしてやるな。問題児だが……問題児ではあるんだが……」

夜蛾さんが少し言いくさそうに口を開く中、校庭の中心に氷の花が咲いて五条さんの周囲を包み込んだ。

「あれ？ おかしいな。君って無下限術式の使い手だったよね？ なのに右手が少し凍っているぞ？ ああ、そうか。未だ反転術式が使えないんだっけ？ 平安時代の無下限持ちは使えたのに情けないねえ」「うっせえ！ さっさと会得してテメエなんか祓ってやるよ！」

「怖い怖い俺に掠りもしない攻撃をしてくるなんて恐ろしいな。じやあ、怖いから少し本気を出そうか。ああ、今言っておくけれど、俺って小さい氷を空中に撒いて呼吸した相手の肺を壊死させる技は使っていないから。だって反転術式も使えない君には怖くて使えないよ」  
「がー!!」

何と言うか、性格の悪さでも勝負でも童磨の方が勝ちそうだ。五条さんがどんな速度で近付いても次の瞬間には童磨はヒラヒラと避けて煽るし、無下限術式って奴で防御したら限界が来るまで四方八方から攻撃しながら煽るし。

「本当に性根が腐っているな、彼奴は」

「先生もそう思う? 僕もだよ」

帯の隙間から見た先生の顔は完全に呆れた時の物で、そんな視線を向けられている童磨は五条さんから少し距離を取ると両手で印を結ぶ。

「うん、このままだと何時までも終わらないし、ちよつと荒療治と行くか。領域展開・万世極楽大寒地獄<sup>ばんせごくらくだいかんじごく</sup>」

強い光が童磨から放たれた時、堕姫が咄嗟に目を帯で塞いでくれたから眩しくなかつたけれど、帯が無くなったら校庭に氷の屋敷が出来ていた。

「領域展開……まさか奴が使えるとはな。鶴が使ったという報告があつた時に確かめておくべきだった。創示君、他に使える者は居るかね?」

「へドラだけだから安心して、夜蛾さん」

「いや、有る意味一番厄介そうな奴が使えるな。……むつ?」

氷のお屋敷が崩れて、中から腕が片方無くなった童磨と服が凍って砕け始めたけれど無傷の五条さんが立っていた。

「はははははっ! どーだ! 反転術式、会得してやったぜ!」

「凄い凄い。所で君って今は全裸だぜ？」

腕を再生させた童磨が言った通りに五条さんの服は全部砕け散ったけれど本人は平気そう。ハサンは恥ずかしいのか手で顔を覆っているけれどさ。

でも、堕姫は平然と五条さんの股間を見ていて、普通の大きさの声で言ったんだ。でも、それは響き渡った。

「ちっさいわね、アンタ」

この時、最強になった筈の五条さんに大きなダメージが入った。反転術式って毒だけじゃなくって心の傷も癒せないんだね。

「あはははははは！ まあ、アレだよ。最強になったんだから良いじゃないか。六眼と無下限と反転術式、結構な組み合わせだって。それならお嫁さんを選び放題だ。ちっさくても大丈夫、ぶっ！」

五条さんが反転術式を会得した事は直ぐに高専内外に広まった。五条さんが心にダメージを受けた堕姫の言葉も一緒に。その日の晩、未だ落ち込んでいる五条さんを堕姫が煽り、そして殴られるんだけれど夏油さんや庵さんは（童磨の姿を含めて）爆笑しているし、七海さんだって笑いを堪えている。

「五条さんって不良っぽくて怖い人だけれど慕われているんだね」

「いえ、信頼はあっても尊敬はない人ですし、慕っては居ませんよ？」  
七海さん、容赦無いなあ。普段の行いって本当に大切だって僕が思った時、先生から渡されていた携帯に着信が入る。残念だけれど最新型じゃない子供用のなんだけれど知らない番号だ。えっと、こんな時は……。

「妓夫太郎、代わりに出て」

「ああ？ 仕方無えなああ。……おい、誰だよ、テメエは」

何で僕の番号を知っているのか分からないし、出た方が良いかもだけれど知らない人だと怖いし、先生も席を外しているから多分妓夫太

郎が適任だと思う。矢っ張り知らない人だったみたいで怪しんで  
るみたいだけれど、漏れてる声には聞き覚えが……。

「極之番だあ？ そんなの未だ……」

「極之番？ 僕の？ それなら……もっこっ！」

思わず喋ろうとしたんだけど、妓夫太郎に口を塞がれる。喋る  
なつて事かな？ 個人情報だし。

「大体餓鬼がそんなの使える訳がねえだろうがよお。誰か知らないけ  
れど二度と掛けて来るな！」

妓夫太郎は電話先に怒鳴ると通話を切つて、携帯を手にして立ち上  
がった。

「夜蛾のオッサンの所に持つて行くぞ。探つて来た奴を調べないと  
なあ」

「あつ、そうか。刑事ドラマとかでやってるのと同じ奴だね」

「ドラマだと使い捨てとかで意味がねえんだが、一応だ、一応。テメエ  
も不用意に喋るんじゃないよお。ったく、これだから餓鬼の世話は大  
変だぜ」

「妓夫太郎は頼りになるね」

「当たり前だ。俺は兄貴なんだからよお」

確か人間だった頃は小さい時から堕姫を育てていたんだっけ？  
だから手際良く面倒が見られるんだ凄いなあ。

「矢っ張り妓夫太郎は格好良いね」

「……うっせえ」

照れてるや。それにしても電話の相手つて誰だったんだろう？  
禪院家への襲撃でこの前会ったお酒臭い人と女の子達以外は大勢殺  
されたらしいし、最近物騒だからなあ。

「所で天元つて誰なんだろう？ 教えて貰えなかつたし……」